雛壇に上がった祐天上人

大正大学教授　玉山成元

いつのことであったか、テレビで曲水宴が放映された。奈良明日香でのことである。古代人の服を身につけた人々が、きれいな庭園の泉水の流れに杯を浮かべ、上座から杯が自分のところまで流れてくる間に詩をつくり、杯を取って飲みほすという遊びである。芝生の上に毛氈をしき、笙・篳篥・横笛など、烏帽子をつけた楽衆のかなでる雅楽の旋律は、見る人、聞く人の心を幽玄の世界へとひきずりこんでゆく。のんびりした風景の中に緊張している人々の顔と、詩を詠んでほっとした人々の顔が写し出され、雅の世界を満喫することができた。

この曲水宴は奈良時代から始まり、雛流しと結びついた行事である。三月三日桃の節句は、もともとは上巳といって、三月最初の巳日に人形を作って身の穢をはらい、これを水辺に流して棄てる信仰であったが、やがて月の数と日の数を重ねる節日が尊重されてから三月三日となった。もちろん雛人形は紙雛の立ち姿で、素朴なものであった。雛人形が布製になり、雛壇を一段だけもうけ、小さな屏風を背に、すわった内裏雛が飾られるようになったのは、江戸時代まで下り、元禄ごろであろう。その後雛壇も三段あるは五段にし、内裏雛のほかに天神や金時・弁慶・犬張子など、雛祭りには関係のない、いろいろな人形を飾ってにぎやかにすることが流行した。五人囃子や三人官女、衛士（仕丁）、桜と橘などの揃った雛壇の定型ができるのは、江戸時代の後期になる。

あかりとつけましょぼんぼりに
お花をあげましょ桃の花

となるのはこの後である。祐天上人の活躍されたのは江戸時代の中期であり、まだ定型ができる前であった。しかし三月の節句がこれから盛んになろうとする時代になっていた。

『明顕山寺録』（祐天寺の記録）によると、宝永四年（一七〇七）二月二十四日、五代将軍綱吉は、増上寺門秀上人や伝通院祐天上人など、江戸府内の檀林（注1）住職と増上寺の長老らを江戸城に招き法問（浄土宗の教えを聞くこと）を行わせた。与えられた題は「一心不乱」で、とくに祐天上人が説法されるようにという命令であった。当日は他宗の高僧たちも招待され、大ぜいいた大奥の老女方も聞くことになった。この席で祐天上人は、「一心不乱」というのは、念仏者の最も大切な心がまえであり、念仏をするときは、心を一つにして乱さないようにし、心の底から阿弥陀様を念ずるようにしなければならないことを力説した。小僧時代からつらい修行を続け、何度か中断しようかと思ったことであろう。それを見ぬきつつ、よりきびしい修行を要求したのが師匠の檀通上人であった。そのかいあってすっかり実力をつけた祐天上人は、諸国の人々にあってなやみをきき、その解決に力を入れることになった。その経験から説きあかす説法は、聞く人々の心にせまり、深い感銘を与えた。まさに生きた仏の説法であった。鋭く人間の心を

雛壇に上がった祐天上人

大正大学教授　玉山成元

とらえた説法は、多くの人々を感動させた。当日熱の入った説法をみすの中で聞いていた綱吉の側室お伝の方（瑞春院）は、祐天上人の徳の備わった姿を見て、あまりのありがたさに感激し、慈悲に満ちた祐天上人の姿を残したいと考えた。そこで自ら祐天上人の座って説法されている像を作り、長悦像と名づけた。祐海上人の覚によると、この人形には、紫衣と緋衣に御袈裟、白綸子や白羽二重の綿入りをはじめ、赤い茵（ふとん）まで作られた。いずれも最高級の織物であり、袈裟は金襴を用いたと思われる。そればかりでなく、三月の雛祭りのとき雛壇に飾り、ことのほかご馳走をしたという。まるで生きている人と同じように接待していたことがわかる。古代から高僧といわれる人々は多いけれども、大奥の雛壇に飾られた人の名は知らない。いかに尊敬されていたか言葉では表現できない。この後長悦像は瑞春院から陽春院香青へ下され、やがて祐海上人（祐天寺二世）に下された。祐海上人は、増上寺に栄転されて間もなく祐天上人にこの像を見せた。これを見た祐天上人は笑われたと記録には書いてある。祐天上人の心情はどうであったろうか。

長悦像が作られた宝永四年という年は、祐天上人七十一歳のときで、大奥に召されてご馳走された回数が異常に多い。五月を除く毎月大奥に召されている。なぜこの年だけこんなに多かったのか明らかでないが、当時伝通院の住職であった祐天上人は、破格の待遇であった。すでに増上寺の三大僧正と同格で大奥の待遇をうけ、宝永二年六月、綱吉の生母桂昌院の臨終には善知識（注２）となって十念を授けている。翌宝永三年には、清揚院（徳川綱重）を伝通院から増上寺に移している。こうした事実から考えると、祐天上人の信頼は絶大なものであったことがわかる。将軍をはじめ、大奥の人々がこのようであったから、一般庶民が帰依するのは当然である。だからこそ家宝とするために六字の名号（南無阿弥陀仏）を授かりたいと人々が群参したことも理解できる。高齢の上に多忙な生活を続けていた祐天上人は、その願いをかなえてやった。まれに見る高僧であった。

（注１）檀林＝学問寺。江戸時代の浄土宗では、関東の十八檀林が知られ、その中江戸には増上寺・伝通院・霊巌寺・幡随院・霊山寺の五檀林があった。

（注２）善知識＝人を善い方へ導く善き人。とくに浄土宗では浄土往生の念仏の教えに導く人をいう。